
流麗果敢

imaiwa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流麗果敢

【Nコード】

N3425F

【作者名】

imaiwa

【あらすじ】

雲が流れるように、成行きに身を任せ、滞る事を嫌う男浩平。浩平は、ある日街で出会ったパツキンと魔界へ行く事になる。ちよつと変わった浩平君の生き様を淡々と語ります。

第一話、魔界行く。

「どこどこさ？」

「魔界よ」

俺は今魔界にいるらしい。俺の前を歩くパツキン女がそう言うのだから、そうに違いない。

「ほら、見て見て」

「ほお、確かに魔界っぽいね」

小高い山から一望できる風景に、視線を流す。

うん、確かに魔界かもしれないね。まず空が赤い。怪しい黒い木も生えてるし、全体的にシックな雰囲気で纏まっている。たぶん、魔界はこんなところなんだろう。

「でさ、俺この後どこ行くの？」

「さあ、取りあえず、あんた人間だし、魔王様に挨拶かな？」

「魔王？ 確か偉い人だね。俺ここじゃ密入国者だし、挨拶は必要だな。分かった、会いに行こうか」

そう俺はさつきまで、普通の人間社会にいて、高校に通っていたんだ。このパツキン女と会うまでは……あまり好きじゃないんだが、ちよっと過去に遡ろうか。

）

「浩平、赤鉛筆貸してくれよ」

「おう、ほらよ」

「ありがとな」

退屈な授業が始る。いやいいんだ、黒板に書くものをノートに写して、聞いてたらいいだけなんだから、楽なもんだよ。ただ、面白くないけどな。内容がね、つまらない。だけど、どーでもいいんだ。肅々と6限授業を受ければ、晴れて解放されるんだから。そしたら遊びにいけるんだし。

放課後

「武！ 一緒に帰ろうか」

「ごめん、今日彼女とデートなんだよ」

「そっか、じゃあまたな！」

武の奴、今日はデートらしい。せつかく武とゲーセンでも行こうかと思っていたのに、まあいいよ、だって武の都合も尊重してあげないとな。いいんだ、俺は。

「あ、その君！ おねーさんと魔界行かない？」

「魔界？」

帰り道、細い路地を歩いていたら、パツキンの女に声を掛けられた。おもいつきし外人顔。アメリカ人か、その辺の人だね。ただ日本語流暢、ペラペラだ。魔界ってなんだろう？
ちよつとばかり、聞いてみようか。

「魔界って何ですか？」

「魔界知らないの？ 魔界っていえば、陰湿で暗い人たちが、うようよいるところよ、あー人じゃないかもね」

「はーそうですか、有難う」

さすがの俺も、そんなところには行きたくない、丁寧にお辞儀をした後、通り過ぎようとしたんだけど、パツキンの白くながーい足が、通行を遮ってきた。

「いきましようよ！ ね！」

「はあ」

押しの強いパツキン女だ。赤っぱいミニスカートに白いブラウス、ハイヒール。よくよく眺めみると、色っぱい格好してるよ。胸でかいしさ。

いつも雲が流れるように、気ままに生きている俺だけど、さっきの説明聞いただけでは、俺の気持ちはノーなんだ。でも悩む事はしない。常に流れを滞る事なく進むのが俺の生き方なんで、取りあえず、断わる前に利点を聞いてみよう。そこへ行って何か俺にメリットがあるかって事をね。

「魔界行つてなんか俺に良い事ある？」

「えーっと、強くなれるかもしれないわ、でも、下手したら死ぬかも」

ふむ、メリットはあるようだけど、リスクも高いようだ。だけど、強くなれるって言うのは、良いなあ。俺はよわっちいから強くなりたかったんだ。よし決めた。行こうじゃないか。

「ok！ どこへでも浚つていってください」

「おー良かった、じゃ行きましょうか」

「はい」

）

こういったかんじで、今魔界にやってきているんだ。

大きな赤い塔が見えてきた。触手みたいなものが建物に絡まり、人間の骸骨みたいなのが装飾品みたいに外壁に飾られている。趣味悪いな、でもこの人にとっては宝物なんだろう。

人の趣味を一概に否定するのは良くない事だ、そう、祖母に教えられた。祖母死んだけど。

「上るわよ」

「はい」

塔の中に入ると、真っ暗なんだけど、真ん中だけライトアップされていた。

その光の一带には螺旋階段が見えていた。パツキンを先頭に上っていく。ずんずん上っていく。まだまだ上っていく。それでも上っていく。まだかよ？ 疲れてきたぞ。

「まだ？」

「もうちよいよ」

息が切れる。俺は肩で息をし始めていた。

パツキン女はハイヒール履いてる癖に、器用にすたすたと上がっていく。俺は運動靴なのにもうかなり先行かれている。きっと、普段から足を鍛えているんだろう。陸上の選手とかなんかなんだろう。どうでもいいか。

「ここよ」

上から音が反響して俺の耳に届いた。パツキンのいる場所までもう少しかかりそうだ。

第二話、魔王。

「魔王様へ人間浚ってきました」

「人間入ります」

パツキンが人間って言うから、つい人間言ってしまった。

俺には浩平って名前あるのにね。パツキンは俺の右手を幼稚園児の手を引くように、柔らかく握り中へと連れて行く。

松明なようなものが、部屋にいくつかある太い柱に備え付けられていて、とこどころ明るいんだけど、うーん、中世の監獄というところか、まあ陰気ですな。

奥までいくと、やっぱり魔王様の部屋には玉座はあるらしく、そしてそこには偉い人が

「やー人間よくきたね、気楽にしたまえ」

偉い人がいるんですが、ゴリラというかチンパンジー寄りの貧弱そうな猿が座っていた。

俺の顔を陽気な顔で見つめながら、バナナ片手にパツキンに何やら指図しています。

はー魔界って猿王国なんだって一瞬思ったんだけど、パツキンが猿じゃないからそうでもないんだろう。王様だけ猿なんだ、そうに違いない。だけど、気にするほどでもないよな。

「はい、これ、バナナ」

パツキンは白い皿にバナナ乗せて持ってきました。ご丁寧に丸椅子まで持ってきてくれました。俺はその応対に微笑んで、椅子と皿

を受け取って腰掛けました。

バナナか。あんまり好きじゃないんだよな。しかし食べよう。出されたものは食べる。これ俺の家の家訓なんだ。

「バナナ飲み込んだら自己紹介はじめるんで、口の中のもの無くなったら教えてくれ」

王様はもう食べたらしく、饒舌に語り始めた。好物らしく、俺が持っているバナナにまで視線が突き刺さっていた。そんなに欲しければ、もっと持って来れば良いのに……

「王様食べ終えました」

俺はバナナを食べ終えたら、隣に立っていたパツキンにバナナの皮が横たわる皿を渡した。

「うむ、見事なたべっぷりで、気に入ったよ、でわ、自己紹介しようか」

小さな玉座の上に立ち上がり、右足を肘掛の上に上げて腕をくんでいる。今更格好付けても　とは思うけど、その格好も俺の目にはそれほど格好よく映らない。まあ猿だしね。

「ワシは、魔界の王ルシファー、この世界の王にして絶対者、強力な魔力を操り、岩をも砕き、五つのエレメンタル魔法を操る最強の魔道師でもある」

ほーすごいな、見かけから到底想像できない、プロフィールの素晴らしさ。思わず俺は拍手をしてしまった。パツキンも一緒に吊られて拍手しただけで、どこか冴えない笑顔を浮かべていた。

「で、そのパツキン女性は」

「シルビア・フォスターです、えーっと魔王様の部下やっています、よろしく」

拍手に酔いしれはにかみながら、まあまあ、とこちらへ手を翳していた魔王様はパツキンの紹介を促した。パツキンはそれを聞いて、俺に自己紹介を語った。さてと俺もしょうか。

「高田浩平、16歳、高校生、人間よろしく、あ、浩平と呼んでください、以上」

簡潔に纏めてみた、これ以上ないくらい。浩平と呼んでもらうことも付け加えた。

「浩平君か、いい名前だ」

ふむ、いい名前……らしい。

「魔王様、自己紹介終ったし、浩平君にここへ連れてきた理由を話さない」と

「おおそうだったな、ここに浚ってきた理由はじゃな」

うーん、いまいち分らない、二人は俺を連れてきたのか、浚ってきたのか。だけど、気にしない、話を聞こう。

「君をここまで浚ってきたのには訳がある」

やはり、浚われたらしい。魔王様はたった姿勢からずとんつと腰を下ろして、椅子に腰掛けた。そしてまた口を開く。

「実はな、ワシも年でな、なんていうか、疲れているわけでき、そろそろ隠居したいわけよ、荒くれどもを統治するのも、それなりに大変でな、だから、君に魔界を統治してもらいたい。

いわば、ワシの代わりに魔王としてこの世界に君臨して欲しいという事なんだ」

……、俺は今まで、言葉に詰まるというか、頭が真白になるとか、そういう事は微塵も起こさないよう心がけてきた。しかし、今ほんの少し、思考が停止しかけた……だけど、持ち直したよ。ふむ、魔王になれと俺に仰っている。俺を見つめる魔王様の瞳は実に澄んでいて、嘘を言っているように見えない。どうやら本気のような。魔王か……なんか格好いいよな？ なってもいいかもしれない。よし決めた、OK。

「分かりました、謹んでお受けします」

「おう、やってくれるかゝ！ そうかゝ！ アハハハハー！」

薄暗い部屋の中に魔王様の笑い声がこだまする。シルビアもまたとびつきりの笑顔で拍手している、しかもそれは俺に向けられていた。

第三話、終結（前書き）

思いつきストーリー終らせました。
やっぱ衝動書きは駄目ですね（汗）

第三話、終結。

「じゃ早速じゃが、渡したい物がある」

「はい」

ルシファーは裂帛の気合と共に何やら力みだした。すると、胸のあたりから七色の丸い球が現れる。綺麗だなあって見つめてたら、それを俺の心臓の辺りに突き出してきた。思わず後ろに飛びのこうとしたんだけど、左手を掴まれ動けなかった。

「心配するな、直ぐ済む」

その球を胸に押し当てたかと思うと、すっぱり何の痛みもなく、中へ入ってしまった。

俺は少し動揺して、ルシファーの顔にきよどった視線を向けた。

「ふう完了じゃ、これで今日からお前は魔王だ」

「は……」

何か今の瞬間魔王になっただけらしい。

とはいえ、どこも変わったところ無いような。俺は体のあちこちを触った。まず頭、角でも生えてないか、次背中、羽はないか、尻、尻尾もなかった。

まあいいか。

「で、俺この後どうしたら良いんですか？」

「シルビア部屋案内してやってくれ」

シルビアのさっきまでの穏やかな表情が一変した。

「は？ 誰に命令してんだ、猿失せろ！」

「あ、ごめんなさい、もう僕ちんただの猿でした」

ものすごく冷たい目でルシファーに言ったんだよ、さっきまで魔王様とか言ってたのに。ルシファーはキーキー言いながら、どこかへ走り去って行った。

俺はどうして言い分からず、思わず無口になりかけたんだけど、事態を進めるために敢て声を絞り出した。

「シルビア、俺これからどうしたら良いんだ？」

ちょっと質問するのが怖かった、さっき本性見てしまったから。あの形相が俺に向けられたらどうしようかと思って恐怖していた。

「魔王様、お部屋にまず案内致します」

よく分からないが、俺には忠実のようだ。さっきの出来事は見なかったことにしよう。

#

「ここがお部屋になります」

「うむ」

うむとか言ってしまった。魔王っぽい話し方に変えて行く俺の意思の表れだ。これから魔王として生きていくんだから。

本棚、テーブル、椅子、明かり、そして、ふかふかのベッドがある。柔らかいなあ。触った感触では何か、羽毛のようなものが入っている。寝ころがってみた。寝返りうつてみた。靴も脱がずにその上で飛び跳ねてみた。

いいね！俺の家にはないもんだ。煎餅布団とは偉い違いだ。ははは良いぞー！

テンションあがってきたんで、シルビアに色々聞いてみる事にしよう。

「シルビア！魔王の仕事とはなんぞや！」

ちよっと調子こいてしまった、しかし、ある意味核心をついた質問だ。

「魔王様の仕事は魔界の秩序を守る事です」

「ふむ、具体的に何をすれば良いのだ？」

「魔王様は取りあえず、元人間だったので、この世界に慣れて頂くことから始められるのが無難かと思われます、ですから、今日は魔王城での生活に慣れてください」

シルビアはそう優しく俺に言っと、部屋を出て行った。まあもうここが俺の自宅なんだし、トイレがどこにあるのかとか、お風呂の場所とか、配置を知ったほうが良さそうだな。

一通り部屋は見終えたし、城内探検に出てみるか。

螺旋階段はもう行きたくないので、俺は王の間にやってきた。あの長い階段を下りなくても階下に行く階段があるはずだ。あちこちこの階を練り歩く。取りあえず、玉座にも座ってみる。まあまあの座り心地だ。さっき俺の部屋、つまり王の部屋へ行く時右側の扉から入ったんだ。こつちくる時も潜った扉だ。じゃあ左の扉を開こう。俺は赤い扉をギィーっと重々しい音とともに開け広げた。石の廊下が続いている。真ん前に四角い窓があつて、冷たい空気が俺の顔に吹き付けてくる。窓に近付き覗いてみると、眼下には歩いてきたときに通った森が見える。

あの森はこの魔界と通じるパイプ役だと来るときシルビアに聞かされていた。

シルビアがビルの壁を指して、ここ入り口ですよって言う事で、そこへ飛び込んだら森の中にいたわけだ。名前は知らないけど、あそこを通れば現実世界に帰れるはずだ。

と……このへんにしとこう、さて探索探索つてもう3時間廊下が続いていた。

しかも、もと居た扉が見つからない。俺はいらいらしていた。物事すんなりいなくなってくると、俺の気持ちは荒んでくる。

「ふざけやがって……誰だこの城作った奴！ 出て来い！」

大きな声で叫び始めていた。窓はあるが、ここから飛び降りるわけにもいかないしな。

そう思った矢先、突然背中に違和感が走る。首を捻ると、何か黒い大きなものが目の端に映った。これってまさか俺の……？ バタバタするイメージをすると、羽もバタバタ動いた。

羽じゃん！ てことは飛べるじゃん！ 窓から早速出るぞ と思っただけど、窓が小さいんだよ。羽がつつかえるよ、これじゃ。俺はいらいらしたんで、壁を握り拳で叩いてみた。崩れ落ちる壁、

前のめりに空へ放り出された。

「うわあああ、ちょっと、落ちる~~~~」

そうだ、羽をバタつかせるんだ。羽に神経を集中すると、羽ばたきが始まり、俺の降下速度がどんどん弱まり、最後には宙に浮いた状態で止まった。背中の辺りで羽が忙しく動いている。

「よっしゃ~~、もう俺帰る……」

そう、俺はあの魔王城が嫌いになってしまっていた。そしてよく考えると、母ちゃん心配するなっとなにに返ると、家に帰る事を決意していた。

「森を抜けるぞ」

物凄い速度で急降下し森の入り口に突っ込んだ。少し速度を落としながら森を進む。

あの明かりは、そうだ、あの明かりはあのビルの合間の路地に出るんだ。スピード落とすというか羽をしまつて、ここから歩こう。羽が背中に埋まる感触と共に背中から消えうせた。

二本の足で光に向って歩むと、現実世界へ俺は帰ってきた。

「ああ、やっぱりこっちがいいや〜！」

俺はなぜか歓喜して、その場で飛び跳ねていた。そして自分の生き方を変える事を決意した。

やっぱり、たまには慎重に考えないとね！

くだらない俺の魔界での話しはここで終結した。

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3425f/>

流麗果敢

2010年10月28日06時30分発行